

私の幼児教育論

——身体は衣服にまざる——

「あなたにとつての師は？」というアンケート調査をまとめた特輯を、ある雑誌で読んだことがある。回答者たちが有名、無名の教師の名をあげていた中に、私の目をひきつけた回答があった。ある外国文学者が「私の失敗」と書いてあったからである。反面教師的な意味をもっているが、よく考えてみると確かに自分の失敗こそ自分を鍛え、教育してくれていると言えるのである。人間は失敗の経験によって賢くなつていくし、二度の失敗を避けるため注意深くなつていくものである。

私の失敗も私の考えや行動に大きな影響を与えてい



太田愛人

る。言葉で弁明するより生活で訂正していくしかなしやうのないことも経験する。私は十年前まで、一八年間、信州のアルプス山麓で幼稚園園長をしていた。今でも幼児教育のことを考えるとき、園長時代の経験が前提になることが多い。そして失敗が最も尾をひいていることを意識している。私の著書『羊飼の食卓』は園長時代の生活記録である。よく、牧師のくせにどうして食い物の本を書くのか、と訊かれることが多いが、牧師（羊飼）は羊に草を与える仕事なんだ、と弁明することになっている。そして羊飼の失敗が食べ物の本を書かせた、と言つても

いい一つの事件のことを思い出す。

それは園児の一人が糖尿病になった事件である。担任の教師にくわしい事情を調べさせたところ、酒好きの老人好みの食事につきあっていただけにあるらしかった。老人か酒飲みがかかる病気にとりつかれた園児を見て、私は頭をかかえてしまった。その家は三方が田や畑で囲まれているところであり、いわば食糧をつくり出す中で生活しながら、大都市の中で生活しているうちにかかるような病気になってしまったのである。生産から離れて消費に傾いていく風潮が、農業地帯にも容赦なく流れてきている現実を見る。そして、むしろ大都市より農村のほうが都市化からくる消費生活の弊害は大きいのではないか、と考えるようになった。同時に私のやっている仕事にも徐々に変化があらわれてきた。いわば失敗が私の教師となってくれたのである。

それまで、私は毎週、幼児に聖書の話を教え、毎月、母親たちに聖書講話をして心や精神についての話に集中しがちであった。そして身体について触れることは少な

かった。しかし、聖書の中には身体について言及している箇所が大変多いのである。キリスト教信仰がギリシヤ、ローマに受容されていくと、キリスト教徒は貧しい人びとが多かったにかかわらず自殺や幼児殺しを絶対にしない点で目立ったくらい身体については尊厳は徹底していたし、新しく出来ていく教会について分かり易く説明する際に、パウロは身体の機能を例にとつて説明していたのである。イエスも（人のつくる）衣服よりも、（神が与えた）身体のほうが勝ることを語っている。

残念ながら、日本の伝統的な考え方に衣・食・住の順があり、なかなかこの順は生活の中で変えられないのである。幼児でも食をおさえて衣に執着する気風が徐々に強くなつてきて、母側はそれにわをかけたように食うものも食わず着るものに目うつりする傾向が強い。外国から帰ってくる人びとは、口をそろえて日本の、とくに若い婦人層が良いものを着て、食が貧しいことを指摘しているのを私は多く聞いている。身体を養うことよりも衣装で身体を飾ることに熱中させる情報がTVや雑誌で、

辺境まで送られてくるのである。私はだんだん腹をたてはじめた。牧師という仕事上、結婚式を司式する機会が多いのであるが、披露宴のたびに憂うつになってしまっているのである。出席者の迷惑も考えず、いつ作ったか分からない御馳走をあてがっておいて、新婦のお色なおしと称する貸衣裳の展示会を延々と見せつけられ、馬鹿ばかしくなつて無然としていると司会者から拍手を強要される愚かしいくりかえし。もしかしたら、人生の第一歩から衣に対する異様な執着が、家庭の食生活へのしわよせをしているのではないかとすら勘ぐりたくなるのである。

食生活の見識も伝承もうけいれられず、自身または子供を飾ることに駆りたてているような風潮が、何の抵抗もなく農村にまで流れてきていたのである。むしろ、動物の生き方から人間が学んでもいいのではないかと、とすら考えるようになってきていた。そして幼児に関する限り、生活環境は絶対に田舎がいいと説くだけでなく体験させなければならぬことに気がつき、食生活の改善と体育の強化を自分なりに考えてカリキュラムに加えるこ

とを試みた。身体を鍛える場所は七百坪の園の敷地は十分であり、体を動かせば腹がへる。「空腹は最上のコック」を生活の中で徹底させることを試みた。人間の出発にこのバイタリティがどうしても必要なのである。幼児期にバイタリティをさまざまたげてはならないのである。

新渡戸稲造がしばしば語っていた人間の進歩を幼児期からの成長に転用してもいいと思う。「人類ははじめにバイタリティが支配し、次はメンタリティに進み、次にモラリティに進展し、最後にソシアリティに至つて社会共存の理想を達成し得る。」どうやら私は幼児たちにモラリティから説いていたような気がする。私だけでなく、現代社会は、幼児のバイタリティを抑圧してソシアリティやモラリティを強要していたような気がする。そして大人はといえば、一向にソシアリティを身につけることができず、バイタリティやメンタリティの段階にとどまつて社会の進歩とは金をもうけること、と心得ているようだ。幼児に老人の食物を与えて身体を糖尿病にしているようなことが、精神の領域でもおこっているのである。

幼児期における食事のおろそかさが、後年、成長の段階において肉体だけでなく精神的進歩にもくらしい陰をおとすことになる。食物を買うことだけに依存しないで、作ることが教育上、大きな影響があることに気づいた。

過疎地で生活していると、どうしてもとり残された感じを抱かせられ、大都市に見ならう傾向が強くなっていく。中央から幼稚園にもTV、遊具、教材、絵本、教育書の類が流されてくる。そして、それに抗する術を知らない。森を歩くより絵本の森が本物に思え、凶鑑の昆虫のほうが森の中の虫より正確なように見えるしくみになっている。畠から採ってきたトマトより、季節はずれのスーパーマーケットのトマトのほうが上等と錯覚するのと似ている。中心都市の生活より辺境の自然のほうが、どんなに幼児期の人間に必要な環境か分からなくなってくるくらい都市からの情報の威力は強いのである。母親だけでなく教諭までが都市志向に傾いて行き、足元を見ようとしな。

ある年の遠足で、それまで恒例となっていた塩尻のブ

ドウ園への遠足(?)つぶしの論争を職員会議で展開したことがあった。まるで母親たちのブドウの買い出し団体に幼児がついていくかっこうであり、帰りのバスで幼児は疲労のため居眠りをしているのが目立った。往復百kmのドライブを遠足の美名にかくれて行こうことは幼児のためにならないことを知り、町の水道の水源地から牧草地を歩き、湖に出ることを提唱し、二日間わたる討議で決めた。その代り私が先頭にたつて蛇追いをやり、湿生植物を教え、水道の源泉を尋ね、蛇の蛇行を観察させ、スキー場を蔽う牧草に寝て、ころがりおちるあそびに興じさせた。絵本には出てこない野の薫りを幼児にかぎ分けさせてやるのが田舎の特権といえるのである。保育における自然は、たんに鑑賞の対象ではなく、自己を教え鍛えてくれる場所であることを身につけてもらいたかったのである。教師と園児の間に、沈黙の自然が介在することによって、一人の無言の教師が加わっているようなものである。

このような宝庫を背後にもっておりながらそのことに

気づかないほど、大都市からの教育的な情報が田舎に流れこんでいるのも事実である。あまりにも自然に恵まれすぎていると、自然への飢えを感じさせないことも確かである。客観的に幼児教育における自然や田舎のはたす役割、また食物の評価を知るために、ルソーの『エミール』に着目した。それまでは並の教養書、古典と思つて読んでいるのが、一つの失敗によつて私には啓蒙書となつていた。時代の差やルソーに含まれている毒を意識しながらも、現場におけるルソー読みは面白く、毎月一回、三年間にわたつて職員たちと『エミール』の輪読を行った。大都市における『エミール』読書と違い、目の前に山や畑や野がひろがっている場所で読むのは、一種のこころよさを感じさせる。

「経験 experience は教訓 leçon に先だつ」ことを読み、自分の失敗を反省させられたし、自然を見よ、そして自然が教える道を進んでゆけ。自然は絶えず子供を鍛える。ことは田舎におればこそ体験できることである。

その田舎では「都会の悪風から遠ざけ田舎で育てたいと

思う一つの理由がある。都会の悪風は表が美しく塗りたてであるから子供にとって誘惑的で感染し易いものであるが、百姓の不作法には少しも虚色が無い」ことを手近に見聞することができた。そして「農夫のように働き、哲学者のように思考しなくてはならない」ことを身につけていくのである。

都市化の波にルソーをもつて防波堤にしようとする努力は無駄かもしれないが、聖書にある、「身体は衣服にまさる」ことを信念として持ち続けることが哲学者のように思考し続ける一つのきっかけにもなりうるのではないかと考えている。

過疎地と過密地とが人間に及ぼす影響をこの目で見てきた私は、いま、田園と都市との結婚を目論んでいる。互に美点と欠点を認識することから相互理解が生れ、自己を絶対化することなく、相対的に考えていくことから創造的な幼児保育が生れてくるのではないかと考えている。

(神奈川・上星川教会)